

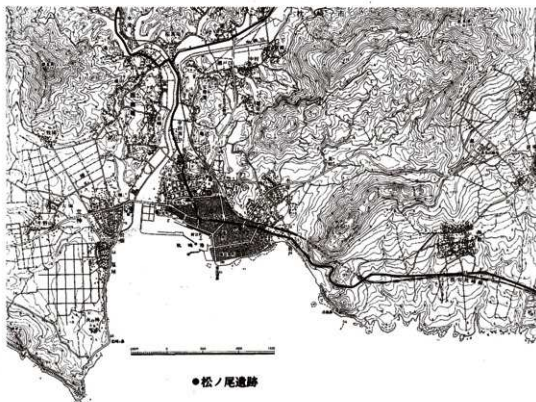
鍬形石の祖形

— 松ノ尾遺跡出土の貝製腕輪 —

1 序

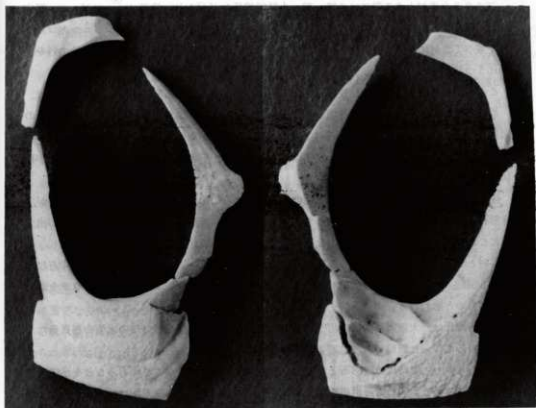
河 口 貞 徳

第1図 松ノ尾遺跡周辺地形図



古墳時代前期の副葬品に碧玉製腕飾類があるが、これらが弥生時代の貝製腕輪から発生してきたものであることは明らかである。^①小林行雄氏は「鍬形石の原型にあたるものは、弥生時代においては、テングニシなどの巻貝を縦に切ってつくられ、男性用の腕飾とされていたし、石剣の原型にあたるものは、イモガイの類の巻貝を横に切ってつくられ、女性用の腕飾とされていた。また車輪石の原型にあたるものは、カサガイに孔をあけてつくられ、小児用の腕飾とされていた。」と述べており、このことについては、学者の見解は略一致している。しかしながら腕飾の祖形となった貝製腕輪の形態や材質については、必ずしも明確にされているとは言えない。いま鍬形石の祖形について多少の資料を得たので、これについて述べたい。

第2図 松ノ尾遺跡出土貝製腕輪



縄文時代の貝輪には、バンケイガイ・サルボウ・アカガイなどの二枚貝を使用したものが多く、まれにアカニシなどの巻貝を縦切りにして使用したものがみられ、産地は本州近海に限られている。

弥生時代になると、テングニシ、オニニシ、イモガイ、カサガイなどが使用されたといわれているが、永井昌文氏の実験にもとづく研究によると、テングニシ、オニニシ製といわれている北九州出土の貝輪は、ほとんどゴホウラ貝製であることが明らかにされた。南九州の高橋貝塚においても、ゴホウラ貝を縦切りにした腕輪と、オオツタノハ貝の殻頂に孔をあけて製作した腕輪とが出土している。イモガイについては、横切りと縦切りの二種類の腕輪がみられる。これらの弥生時代の貝製腕輪の素材は、縄文時代には二枚貝を多用したのに対して、主として巻貝を使用していることが特徴で、しかも種子島以南の南海産の貝が多く使用されていることは、注意を要する。

鎌形石の祖形については、弥生時代の貝製腕輪に求め、大型の巻貝を縦切りした腕輪を祖形であるとする点では、おおかたの意見が一致している。しかし素材についてはテングニシとする説と、ゴホウラとする説の二つがあり、オニニシとする説もみられる。このうち、テングニ

シとする説が多く、定説化した観がある。

ゴホウラを素材とする説には八幡一郎・小林行雄氏などがあり、前者は、^④ テングニシ・護宝螺を縦断した型式のものは碧玉に移されて所謂鉄形石となり云々として、テングニシとゴホウラを並べて素材にあげ、後者は「ゴホウラなどの大型の巻貝を縦に切って作った貝輪の形を碧玉にうつしたもの」として、表現に幅があるが、ゴホウラだけをあげている。

この他に古墳より出土した貝製腕輪を鉄形石の祖形であるとする説もある。高橋健自氏は、^⑤ 福岡県京都郡泉村大字竹並の古墳から出土した、マヒノソデの貝殻で作った腕輪を鉄形石の起源となった(第16図5)、と述べている。その論文の図版に示された腕輪は2個あり、右側のものは腕輪の表面をあらわし、左側は裏面の図で、上下転倒しており、螺塔の切断面が板状部の内側に位置している。

腕輪を出土した古墳の時期が明瞭でないで、鉄形石の起源とすることは即断できないが、鉄形石との類似は、博士の説くとおりであり、九州地方に鉄形石と関連の深い貝製腕輪が出土したことは、その祖形の追求に有力な資料となるものである。

素材となった貝の種類についてみると、螺塔が板状部にくい込んでいる点、環体の片方だけにある突起、袖を利用した板状部などの形態からみて、マヒノソデではなく、ゴホウラを素材としたものと思われる。

小林行雄氏は、^⑦ 大阪府茨木市宇宿庄紫金山古墳から出土した護法螺の類の大型の巻貝をたくみに切断して作った腕輪である(第17図1)。

あらゆる点で古墳時代の鉄形石と共通性をもち、鉄形石の原型がここにあることを示唆していると述べている。同じ紫金山古墳出土の貝製腕輪について、三木文雄氏は「てんぐにしと呼ばれる大形の巻貝をたてに切った鉄形の貝製品(図版4)をうつした鉄形石……」と記して、紫金山古墳から出土した貝製腕輪について、その素材に対する両者の意見は異なっている。そこでこれについてみると、この貝製腕輪の特色は、環体の片側のみに突起があること。板状部が存在すること。板状部内面に螺塔の切断面があることの三つである。板状部を作り出すためには、殻が厚く、殻口がよく発達して、袖状になったものでなければならない。この条件をみたす貝としては、すいしょうがい科の貝があるが、板状部に螺塔の切断面を有する点からみて螺塔が外層の袖にかくれ、個体によっては、袖に密着する特徴をもつゴホウラでなければ、このような板状部を作り出すことは不可能である。環体の突起は、ゴホウラの肩角の突起を利用したもので、この突起はゴホウラには一カ所しかないから、一個のゴホウラの殻からは一個の腕輪しかとれない。肩角の突起を有する貝としては、同じすいしょうがい科の、アツソデガイがあるが、これは螺塔部が外層の袖から離れて独立しているため、板状部内面に螺塔の切断面ができない。したがって、この腕輪の素材とはなり得ない。

今一つの、紫金山古墳出土の貝製腕輪の素材としてあげられているテングニシについてみると、テングニシは、てんぐにし科の巻貝で螺塔が高く、結節突起が弱く、あるいは全く消失するものもある。肩角上の突起はなく、殻口の発達がみられず袖も有しない。これを縦に切断し

て腕輪を作るとすれば、板状部と、環体の突起は作り出すことが不可能であるから、テングニシを紫金山古墳出土の腕輪の素材とみることは不適当である。

鍬形石について、村井忠雄氏は弥生時代のテングニシ製の腕輪の形を石にうつしたものとし、^⑨「頭部は貝の殻頂をたいらに磨り落した形が、^⑩冠状の膨みとして残り、下部は左右に広板状をなし、薄く反り身になって、表面のみに、部分的な刻線を施し、卵形窓と方形状との境目に、片側のみ突起を有する。」と述べて鍬形石の頭部は貝の殻頂に当たるとの見解を示している。

前述したように紫金山古墳の貝製腕飾りの場合は板状部の内面に殻頂があり、頭部は殻口の前溝の部分であって、腕輪においては殻頂部は下になっており、村井氏の見解とは逆になっているのである。ついでに述べておくが、この貝製腕輪の表面はゴホウラ貝の殻口の面であって裏面は貝の背面に当る。したがって表面を前にして着装したものとすれば、環体の突起部を内側に、板状部のほりだし部を外側にして着装したことになる。

村井氏が鍬形石の原形とした弥生時代のテングニシ製の腕輪は、具体的に遺物を示していないので不明であるが、もし紫金山古墳出土の貝製腕輪より推定したものとするならば、前にテングニシ製説について述べた理由によって、ゴホウラ貝製とすることが適当であると思われる。

以上に述べた竹並古墳ならびに紫金山古墳出土の貝製腕輪は、鍬形石の発生について、非常に重要な資料であり、有力な手がかりではあるが、時期的に鍬形石と同時期の存在であるからこれを直ちに鍬形石の祖形とするわけにはゆかない。鍬形石の祖形は多くの人々によって述べられているように、弥生時代に、あるいは鍬形石が発生する以前に、その祖形を求めることが必要である（第17図1）。

福岡県福岡市大字金隈字日焼の所謂金隈遺跡第103号壟槽から、人骨に装着されて出土した^⑪貝製腕輪は、鍬形石の祖形を思わせて、それまでの推移がたどられるとされている。これは、紫金山古墳出土の貝製腕輪が14.9センチメートルであるのに比べて、外径18センチメートルという大きなもので、男性人骨右前腕に2個連ねて装着されていた。時期は弥生時代前期末である。ゴホウラ貝の輪にそって、肩角の突起をはずして、それより、背面よりを縦割りし、外唇の袖を残して仕上げたものと思われる。工作法については、^⑫飯田展図録によれば「このかたい貝を切断するほどに鋭利なものが存在していたとは考えられない。だとしたら考えられるのは、砥石にむかいかなりの時間をかけて根気よく磨り削る方法である。」として、砥石によって磨り削るという方法で製作されたと推定している。しかしながら遺物の写真によると、研磨面だけでなく、打ち割って生じた面が残されていることがわかる。高橋貝塚より出土したゴホウラ貝の腕輪資料によると、初め打割によって適当な形にし、後研磨して仕上げる方法をとっている。西之表市立博物館主事の鮫島安豊氏が実験したところによると、殻頂から螺旋内部を打抜き、内側から打撃を加えることによって、所要の形を得ることができたという。以上にあげた諸点から、金隈遺跡出土の貝製腕輪も、打割と研磨の両工作法によって作成されたものと思われる。

福岡市立歴史資料館に展示されている同腕輪は、欠失部分が復元されているが、これによる

と肩角の突起の部分はなく、外層の袖を利用して作られた板状部分は、環体と同一平面上になく、斜め後方にのびて、環体とはかなりの角度をもっている。出土状況を示す写真によれば、貝殻の腹面にあたる部分を前面にし、貝殻の背面にあたる面を着装者の身体に向け、殻頂を下に、前溝を上にした状態で着装している。つまり腕輪の表面は貝の腹面であり、上下は貝殻とは逆に殻頂を下にしているのである。前述の竹並古墳・紫金山古墳出土のゴホウラ貝製腕輪の場合も、この点ではまったく一致している(第15図1, 2, 4, 5)。

金隈遺跡出土の貝製腕輪を鉄形石の祖形としてみると、環体の形態や板状部を有する点など共通する重要な要素を有し、その系列の中に属することは明らかである。しかし鉄形石の大きな特徴の一つであり、ゴホウラ貝の特色でもある環体と板状部の境に、片方だけにある突起が金隈遺跡出土の腕輪には欠けているのである。これは貝殻の肩角の突起をはずして截断したためであって、遺物自体は当該部分が腐食のため消失しているけれども、環体と板状部とのなす角度からみて、突起を有しないことが推定できる。时期的にみた場合にも鉄形石との間に相当大きな隔たりがあり、形態と時期の面からみて両者を直ちに結びつけることには無理がある。当然その間隙を埋める資料が必要であろう。

以上に述べてきたことから鉄形石の祖形は、ゴホウラを素材として製作された弥生時代の腕輪であろうと推定される。そこでゴホウラ貝製腕輪の系列のなかに、鉄形石の祖形の発生状況をさぐることにしよう。

2 彌生時代のゴホウラ貝製腕輪

現在、ゴホウラは種子島以南の水深20メートル以上の海底に棲息している。先史時代においても、貝塚にみられる貝の種類からおして、現在と同様の分布を示していたものと思われる。

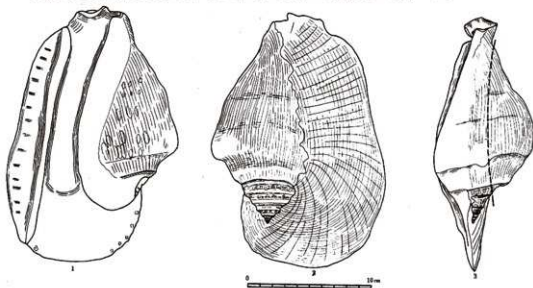
腕輪の素材としてゴホウラ貝が用いられたのは弥生時代以降である。棲息地域である種子島以南の島々においては、奄美大島本島のヤーヤ洞穴遺跡に、すいしょうがい科の貝を縦切した腕輪が出土しており、徳之島喜念原始墓ではゴホウラ貝製腕輪がしられている。喜念原始墓の場合は、弥生時代該当の時期と思われるが、ヤーヤ洞穴出土の腕輪は宇宿下層の時期に比定されており、本土の縄文時代後期に当るものである。もしこの素材がゴホウラであるとするならば、最も早い時期に行なわれたゴホウラ貝製腕輪ということになる。

以上のように、現在のところ弥生時代以前にゴホウラ貝製腕輪が行なわれたことを確実に裏づける資料はない。しかしながら可能性としてはまだ残された分野があるので、その解決は今後にゆだねることにして、弥生時代におけるゴホウラ貝製腕輪について述べる。

永井昌文氏の⁽¹⁵⁾ゴホウラ貝製貝輪の分布図によると(第17図2)、南は奄美諸島から、北は日本海沿岸の島根半島に達し、西日本に限られた分布を示し、その中心は北九州にある。この分布は永井氏のいうように黒潮に乗って上陸したようにみえるが、現実には縄文時代後期以降の各期にわたって、九州とくに南九州の遺物が、奄美諸島・琉球列島の各遺跡において、現地の遺物と共伴出土している事実が示すように、縄文後期以来九州と南島との間には、交易のル

ートの発達があったと思われる。このルートによってゴホウラ貝がもたらされたものと思われる。

九州で最初にゴホウラ貝がもたらされたのは、南九州西岸であり、しかも製品としての貝製腕輪ではなく、素材としての貝であった。それを示すのが高橋貝塚の資料である。



第8図 ゴホウラ貝殻実測図

高橋貝塚は縄文晩期から弥生前期えかけての貝塚である。ゴホウラ貝の資料は、この貝塚の最下層など、下層部から出土しており、腕輪の半成品・完成品残欠・ナイフ形貝器などが出土している。これらは弥生時代前期初頭の時期にあたるもので、ゴホウラ貝製腕輪としては最も古いもので、金沢遺跡 103 号墓棺より出土した腕輪より更に古い時期に属するものといえる。資料の多くが貝層から出土したものであったために、失敗作品または欠損品がほとんどであるが、かえってこのために工作過程を明らかにする結果をもたらした。これらの資料によって腕輪の製作方法を推定しよう。

殻口外唇部を利用したナイフ。第9図がそれである。長さ9～11センチメートル、厚さ1.6センチメートル、断面は三角形で、片側は鋭い刃部を形成している。図の右より2個目は刃部に横線を刻んであり、この部分が特に鋭く、使用痕がみられる。ゴホウラは殻口の外唇部がとくに肥厚しており、厚さが2センチメートルを越えるものもあるが、この部分を内側から斜め方向に、石器によって打割することによって、ナイフ形の貝器を得ることができる。ナイフ形貝器の背部の湾曲は、殻口の外唇部内面の湾曲に一致し（第8図 左）、第12図3は貝製腕輪の未完成品であるが、外唇部を除いた跡をよくとどめている。ナイフ形貝器はそのまま利器として使用したもので、研磨は施されていない。腕輪製作の過程で生じたものの利用であろう。

第9図 ゴホウラ貝殻口外唇を利用した利器



二種類の腕輪。高橋貝塚出土のゴホウラ貝製腕輪は、使用した素材の部分によって二種類に分けられる。その一つは貝の腹面を使用したもの(第10図1、第11図1、2、第12図1)で、他の一つは貝の背面を使用したもの(第10図2、第12図2、3)である。

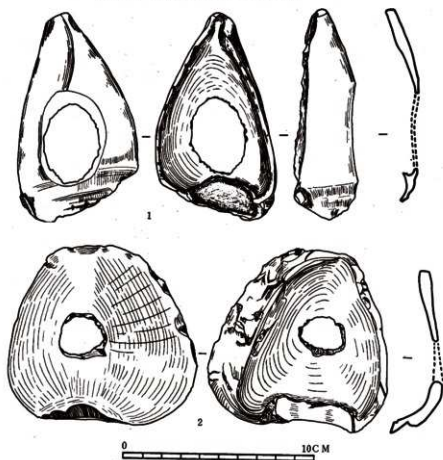
貝の腹面(下面)を素材とした腕輪。ゴホウラは幼貝の場合は他の普通の巻貝と同様に、袖はない。成貝となってはじめて袖ができる。袖は螺塔の一部に密着しながら成長し、これを半ば埋めるような形となり、螺塔は袖にかくれるに至る。螺塔と袖との付着部分には隙間がみられ、この部分は離れやすい。腕輪の作成には、先に殻口の外唇をはずした後、最も弱い部分である螺塔に打撃を与えて、縫合にそって離し、続いて殻口の袖の部分に打撃を加える。この部分は脈に沿って割れやすいので、形よく離すことができる。殻口の外唇、袖、螺塔を除いてほとんど体層のみとなった殻を内側から叩いて半截し、腹面と背面にわけ(第8図右)。この腹面の中央を叩打して穿孔する(第10図1、第11図1、2)、これまでが第1工程で、打割によるものである。図は部分的に研磨の跡をとどめ、第2工程に入ったことを示す。第11図1、2は穿孔に失敗したもので、この作業は脈を切断する部分があるために最も困難な工程である。

第1工程の腹面と背面に二分する場合の截断は、軸に沿って行なわれるが、ゴホウラ特有の肩角の突起は第11図2の例にみられるだけで、他の例ではことごとく除かれていることから第1工程中に除去されたものと思われる。

第2工程は砥石による研磨によって形を整えている。第11図1は腹面を素材とした腕輪の仕上がり品であるが、一部欠損している。現存部分の計測では幅6.4センチメートル、長7.2センチメートル、内径幅4.7センチメートル、厚さ1.5センチメートルである。研磨のために、ほとんど自然面が失われ、わずかに表面左端部に、生貝の特色である腹面の濃褐色の縞状の模様が認められ、殻口内唇部の縁にある浅い溝が、腕輪上端部の表面に残されている(第12図1)。形は両端がそり上ったもので、一端に螺塔の切断面が残っているはずである。この腕輪の表面は貝の腹面にあたり、裏面は半截された面であって、断面は表面から裏面へ向けて「ハ」字状に開いている。

背面を利用した腕輪。前に述べた第1工程で殻を半截した場合に生ずる背面の部分を素材としたものである。中央に穿孔するところまでが第1工程で(第10図2)、第12図2は、第2工程に移る前に失敗したものであるが、製作の過程をよく示している。第2工程の研磨によって仕上げられたのが、第11図2である。現存部分の計測数値は、長8センチメートル、厚

第10図 高橋貝塚出土ゴホウ貝製腕輪



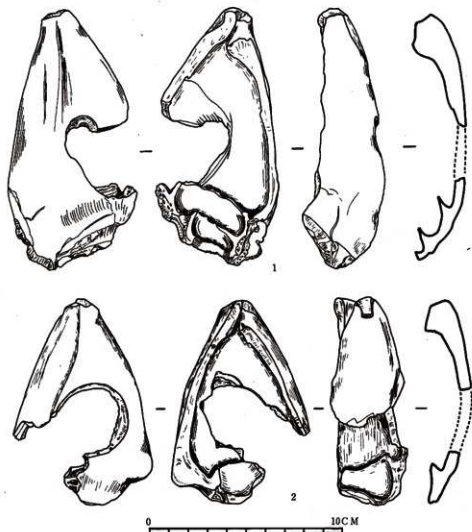
さ2.45センチメートルである。腹面を素材とした腕輪とは逆に、貝の背面が腕輪の表面となり、截断面が裏面となっている。形は側面から見て両端がそり上っており、裏面では一端に前溝の窪みを残し、他端には次体層の湾曲がブリッジ状に残り、螺旋を磨り磨いて平坦にしたあとがみられる（第12図2下）。断面は表面から裏面へ「ハ」字状に開いた形となっている。素材の部位の関係で、腹面を素材とした腕輪より厚く、じょうぶに出来上るのが特色である。

高橋貝塚ではゴホウ貝製腕輪の他にオオツタノハ貝を素材とした腕輪が出土している。

この場合も未完成品が数個出土していて、その製作過程が明らかとなっている。^⑩先づオオツタノハ貝の背面中央付近に径2センチメートル程の孔を、外面からの敲打によって穿ち、これを次第に拡げて略腕輪の形態を整えたのち、研磨したものと思われる。ゴホウ貝を截断した後穿孔法は、これと同じ手法が用いられている。

ゴホウ貝製腕輪は両端がそり上った形態を示すが、このような形は縄文時代の貝輪にはあまり見られないものである。しかしこのような形になるのは、意図的なものというよりも、素

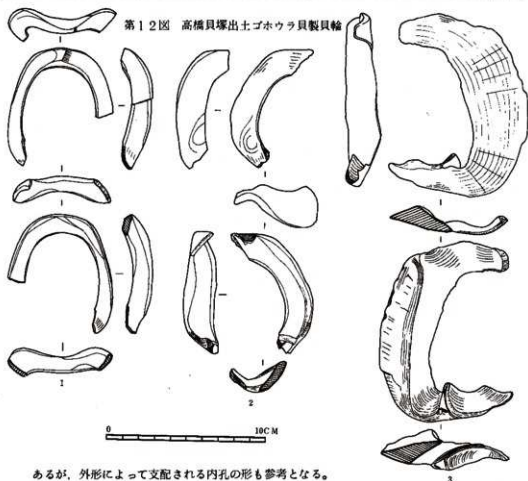
第11図 高橋貝塚出土ゴホウラ貝製腕輪



材の形態によるものといえよう。

高橋貝塚出土のゴホウラ貝製腕輪^⑦の原型については、南島に祖元を求めることも一つの方向であるが、縄文時代においてもアカシなどの巻貝を縦に切って用いており、工作法についてもあまり異なるところがないことから、南島産の素材を用いて、従来伝わった縄文時代の腕輪の製作法を引き継いで行なったものと見ても差しつかえはないようである。

高橋貝塚出土のゴホウラ貝製腕輪は、普通に見られる腕輪であって、鍛形石の祖形になるような要素もまだ現われていない。しかしここに見られる二種類の腕輪は、二つの系統となってその後に引き継がれているようである。以後貝の腹面を素材とした腕輪を「腹面腕輪」、貝の背面を素材とした腕輪を「背面腕輪」と呼ぶことにする。両者を判別する基準は、その外形で



あるが、外形によって支配される内孔の形も参考となる。

腹面腕輪の外形は、素材の腹面の形に支配される。殻口を形づくる内唇部の形は直線的で、反対側の肩角突起側は、弧状に張り出している（第8図左）。この形が腕輪の形を支配して、片側は直線に近く、反対側は弧状に張り出した形となり、内孔は「D」字形を呈する。立岩遺跡・諸岡遺跡出土の腕輪はこの例である。

背面腕輪も素材の形に支配される。背面は肩角突起を有する側面の、張り出した形と、外唇部、袖部を打欠いた形が、輪脈にそって弧状に張り出した形となる。したがって腕輪の外形は両面に張り出した形となり、内孔も円形または、不正円形となる。広田遺跡出土の腕輪がこの例である。

肩角の突起は殻の截断の場所によって、腹面腕輪、背面腕輪のいずれにも付く可能性があり逆の場合もあり得る。事実両者ともに突起を有するものがある。したがって肩角突起の有無は、両者を判別する基準とはならない。従来しられている弥生時代のゴホウラ貝製腕輪について、この分類を施して見ると、次のような結果となる。

腹面腕輪に属する腕輪。

福岡市金隈 103 号甕棺出土腕輪 2 個、弥生時代前期末。

山口県土井浜出土腕輪 9 個、弥生時代前期末。

長崎県浜郷遺跡出土腕輪 1 個、弥生時代中期？。

福岡市諸岡遺跡出土腕輪 8 個、弥生時代中期。

福岡県立岩遺跡出土腕輪 14 個、弥生時代中期。

佐賀県切通遺跡出土 10 個、弥生時代中期？。

神戸市熊野遺跡出土 40 個、弥生時代中期。

鹿児島県松ノ尾遺跡、3 個、弥生時代後期。

背面腕輪に属する腕輪。

鹿児島県広田遺跡出土腕輪、弥生時代後期。

鹿児島県神永良部西原遺跡出土 時期不明。

鹿児島県徳之島喜念原始墓出土 弥生時代該当。

上記によってみると、背面腕輪は、高橋貝塚以外は南の島にかざられ、時期は弥生時代後期となっている。これに対し腹面腕輪は本土にのみ出土し、時期も各期に渡っている。

ゴホウラ貝製腕輪で、高橋貝塚出土のものに次いで古い時期のものとしては、福岡市金隈遺跡 103 号甕棺出土の腕輪と、山口県土井浜遺跡出土の腕輪があり、いずれも弥生時代前期末とされている。(第 15 図)

土井浜の腕輪は長径 10.9 センチメートル、腹面腕輪に属するもので、外形・内孔ともに「D」字形を呈している(第 15 図 3)。貝の軸を含め、肩角の突起をはずして截断されている。螺塔部と前溝部を切り落し、体層を主体として製作され、内孔の研磨で螺塔内の渦巻が内孔にそって残されている。肩角の突起および、袖の部分は除かれており、鉄形石の祖形の系列からははずされる。土井浜遺跡^⑬ 124 号人骨の出土状況実測図並に同図版によると、殻頂を下に、前溝を上、貝の腹面を身体側に、背面を掌側にして着装している。

金隈遺跡 103 号甕棺出土の腕輪は(第 15 図 1、2、4、5)、前にも述べたとおり鉄形石の祖形の系列に入るものの中で、最も古い時期のものである。しかしまだ肩角の突起をとり入れず、袖の部分でつくられた板状部が、環体と相当の角度をもって斜めに開いているという点で、かなりへだたりがあることも前述した。ちなみに、金隈遺跡と土井浜遺跡から出土した腕輪の共通点は、軸を中心にかなり幅をもたせて截断製作しているために、螺塔内部の渦巻が残されていることと、前溝部付近の巻き込み部分が残されて重なり、普通に見られる 1 枚の状態とは異なった特殊な形態を示すことである。

弥生時代中期では、福岡市諸岡遺跡出土の腕輪がある。「D」字形の腹面腕輪である。軸を通る面で、肩角の突起をはずして截断し、螺塔を除いた跡と、前溝付近の巻き込みの部分がブリーヅ状を呈している。体層部を素材として製作され、袖は除去されており、鉄形石の祖形の系列からは、はずされる。

② 長崎県南松浦郡有川町浜郷遺跡第二次調査2号人骨に装着されていた16枚の貝製腕輪のうち、右腕の5枚は、ベンケイガイ製のもの4枚と、ゴホウラ貝製のもの1枚であった。ゴホウラ貝製腕輪は、長約9.2センチメートル、幅約5.4センチメートル、形は「D」字形を呈し、一端（前溝部）は巻込みの重なりがみられ、この点では土井浜遺跡出土のものと同じである。腹面腕輪であるが、工作法に特色があり、肩角突起と螺塔をさけて、腹面側から前溝へ、軸を斜めに切る面で截断されているものと思われる。この截断面は脈を斜めに切ることになるから打割によっては、この截断面は得られない。したがって軸に沿って半截した後、研磨によって仕上げたものと思われる。このような工作法をとったのは、螺塔を除去することと、平坦（そりのない）に仕上げるためであつたろう。

出土状況を示す写真によると、着装法は、殻頂を下に、前溝を上にし、貝の腹面を身体側に背面を掌側に装着しており、殻頂を下にする点では金隈遺跡・土井浜遺跡と一致している。

袖を除いていること、前溝部に重なりのあることなど土井浜系と見られる。時期も土井浜と諸岡との中間ぐらいに位置するものではなからうか。鍬形石の祖形には属しないものである。島嶼遺跡の特色であろうか。2枚貝製腕輪と共用しているという特殊な着装法である。

弥生時代中期後半では、福岡県飯塚市立岩34号壺棺出土の腕輪がある（第16図1）。壮年男子の右前腕に14個装着されていた。貝の軸を通る面で縦割りし、肩角の突起を含め、螺塔と袖を一部残して製作している。肩角の突起は三角形に磨り出され、外形は五角形、内孔は「D」字形を呈し、角ばった形となっている。

着装法は螺塔部を下に、肩角の突起を外側に、貝の腹面に当る面を身体に向けていたものと推定される。したがって螺塔の切断面は外に向けられていた。螺塔部を下位にして装着する点では金隈遺跡と同様である。

肩角の突起と、袖部を腕輪の一部にとり入れていることは、鍬形石の祖形として、要素的に条件を満たしたもので、直線的な形態の点でも一歩前進したものである。鍬形石の祖形の系列にはいり、更に一歩前進したものといえよう。

立岩の腕輪に類するものとしては、神戸市兵庫区熊野町出土の、弥生式蓋形土器に納められた、40個の腕輪がある（第16図4）

後期になると、貝製から青銅製の腕輪にうつし変えられてゆき、本来の貝製のものは稀れになって行く。しかし南九州の一部や南の島々では依然として貝製腕輪が行なわれている。鹿児島県枕崎市松ノ尾遺跡や熊本県南種子町広田遺跡出土の腕輪などがそれである。

広田遺跡出土の腕輪には、オオツツノハ、イモガイ、ゴホウラ貝製などがある。ゴホウラ貝製腕輪の製作法についてみると、貝を縦割りして背面を用いた所謂背面腕輪である。両側に張り出して、外形は不正円形を呈し、内孔も方形に近い円形であって背面腕輪の特徴をよく現わしている。螺塔の一部が取り入れられ、腹面に螺塔が縦切りされて残存している。肩角の突起のあるものと、突起を有しないものがあり、縦割りの切断面が一定していなかったことを示している。背面腕輪の場合は袖部を残存させることは、工作上困難で、製品の形態から見ても鍬

形石の祖形とはならない。

着装については、²¹⁾三島格氏が述べているように、広田遺跡においては、ゴホウラ貝製腕輪は、男性・女性ともに着装例があり、またゴホウラとオオツタノハ製腕輪、ゴホウラとイモガイ製腕輪の組合せ着装の例もあって、イモガイ横切りは女性用、ゴホウラ縦切りは男性用という本土的傾向はない。背面腕輪が南の離島だけに分布するという事実とも考え合せて、習俗の差異を感じるのであるが、物理的条件においても可能性があったことがわかる。即ち腹面腕輪は素材の形態上、如何に大きな貝を使用しても、腕輪の幅は内唇から肩角までの長さとなるから著しく制限される。例えば径13センチメートルの貝を使用した場合、腕輪に使用できる幅は約7センチメートルで、径の54%にすぎない。しかも素材となる体層の形に支配されて、出来上りは「D」字形となる。²²⁾内孔も「D」字形となるが、この腕輪を最大限に利用するとすれば男性用とすることが適当である(第8図、第10図、第11図)。

背面を使用する場合は、外唇を除くだけであるから 径13センチメートルの場合に、使用できる素材の幅は約12センチメートルあり、92%も利用できる。貝の大きさに対して、腹面腕輪よりはるかに大ぶりの腕輪の製作が可能であり、外形も円形となり、したがって内孔も円形とすることができる。内孔の直径を加減することによって男性用、女性用のいずれにも適合できる腕輪の製作が可能である。一般に南方の離島では、地元の利点として、オオツタノハ、イモガイなども大形のものが得やすかった結果として、男性、女性の差によって貝種を定める必要がなかったとも考えられる。一方では、本土において、弥生時代以降あらわれ始めた。縄文時代と異なる、性別による社会的地位の差が、離島においては、まだ明瞭でなかったためと考えられる。

松ノ尾遺跡出土の貝製腕輪には、イモガイ、オオツタノハ、ゴホウラの三種の貝を素材とした腕輪が出土している。ゴホウラ製腕輪は腹面腕輪であり、立岩遺跡出土の腕輪の型式から発展したもので、鍬形石の祖形とみなされる(第2図、第13図1、3、4)。これについては項を改めて述べる。

以上に、弥生時代のゴホウラ貝製腕輪の時代的変遷のなから、古墳時代の鍬形石の祖形が如何にして発生し、発展してきたかについて見てきた。要約すると、弥生時代のゴホウラ貝製腕輪には二つの系統があり、一は腹面腕輪であり、これは本土に分布を有する。他の一は背面腕輪であり、これは、南の島々に分布する。腹面腕輪は、更に袖を取り入れた形態の金環型と、袖を除去した土井浜型に分れる。土井浜型は諸岡型につながり、一方金環型は立岩型を経て、松ノ尾型に到り、鍬形石の祖形となる。

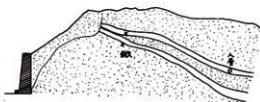
3 松ノ尾遺跡出土の腕輪

松ノ尾遺跡は、鹿児島県枕崎市汐見町松ノ尾にある(第1図)。枕崎港の西北岸壁の背後にせまった砂丘遺跡で、標高拾数メートル、最高地点は22メートルに達する。西側を流れる花渡川が運搬した土砂が堆積してできた河口砂丘である。昭和47年に、港灣に沿って道路を敷

設するために、砂丘の削り取り工事が行なわれた。この工事によって弥生時代後期の遺物と埋
葬人骨が出土した。筆者が報らせによって現地を訪れた時は、既に工事の終了まじかであった。
幸い現地在住の久保春信氏が、出土遺物を採集されたことによって、遺跡の性格を推察するこ
とができた。これについては河野治雄氏の報文がある。

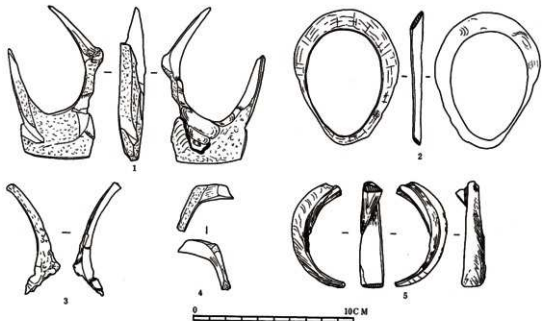
昭和48年4月27日 森浩一氏を
案内して枕崎市に到り、市立図書館に
おいて、松ノ尾遺跡出土のゴホウラ貝
製腕輪を見る機会を得た。その後発見
者の久保春信氏について、出土状況を
たしかめることができた。第3図は久
保氏が示した砂丘の略図である。純砂
層の中に、左から右へ傾斜する二つの

第3図 松ノ尾砂丘見取図



層が見られるのが遺物包含層で、この層中に人骨の埋葬が見られ、弥生後期を主とする遺物が
出土した。問題の貝製腕輪は、工事の進行中に崩落していたものを、図の左端コンクリートの
防砂壁の基部付近で、採集したものである。

第13図 松ノ尾遺跡出土貝輪



松ノ尾遺跡出土のゴホウラ貝製腕輪

第2図および第13図1、3、4がゴホウラ貝製腕輪である。第13図の1は完形に近いも
ので、同図3、4は環体の残欠である。それぞれ別個体と見られるから、3個の腕輪があった

ことになる。第13図1は現存長9.7センチメートル、幅6.5センチメートル、厚1.7～1.5センチメートルである。完形時の推定長は13センチメートルで比較的小形であるが、素材には成員を使用している。工作法は貝の軸と肩角の突起を通る面で切斷した腹面腕輪である。肩角突起と袖を取り入れ、突起は原形を残し、袖は方形に擦り切って板状部を形成している。外形の片側は直線的で、肩角突起側は著しく張り出し、内孔は略「D」字形を呈している。腹面側を表面とし、背面側を裏面としている。裏面は、板状部に螺旋が入り込んだ形となり、半切されて螺旋が残し、環体の内面にも螺旋を擦り落した跡が見られる。腕輪の頂部の線と、板状部下端の線は平行せず、互に反対方向に傾斜し、板状部は、環体からそり上っている。これらの特徴は、初期の楕形石にすべての点で酷似している。蓋頂を腕輪の下端にして形成されている点は、金環・立岩型とも共通している。

松ノ尾出土の腕輪と立岩型の腕輪の共通する点は、肩角突起と袖を取り入れ、全体の形が直線的になってきた点であり、金環型が環体と板状部が相当の角度をもって、形成されているのに対して、前の二者は一つの平面内に、環体と板状部がおさまっている。

松ノ尾出土の腕輪は、立岩型から更に進んで、肩角の突起を三角形に擦り出した形から、貝固有の突起を、そのまま残すようになり、袖の部分を大形化して板状に発達させ、肩角突起から板状部に到る形に、貝固有の螺旋の線と、袖の湾曲の形を取り入れている。これらの特徴はことごとく初期の楕形石に移されているのである(第2図、第13図1)。

松ノ尾遺跡にはゴウラ貝製腕輪の他に、オオツノハ貝製腕輪、イモガイ製腕輪が出土している(第13図2、5)。第13図2はオオツノハ貝製腕輪で、長径13.4センチメートル、内径6.6センチメートルである。一部欠損しているので、長径は現存の形よりやや大きかったものと思われる。他にオオツノハ貝製腕輪の残欠が5個あり、内2個は第13図2の一部分と思われるので、他に3個体あったことになる。表裏とも研磨されて、貝の本来の面がほとんど残されていない。

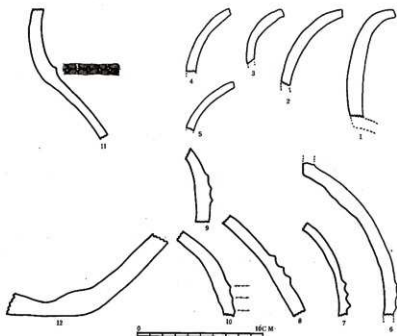
第13図3はイモガイ製腕輪である。現存長6.5センチメートル、幅1.5センチメートルである。イモガイの体層上部を輪切りにしたものと思われる。他に残欠2個が見られるが、別個体が否か判明しない。

<腕輪の属する時期>

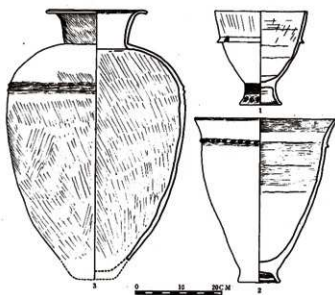
松ノ尾遺跡の時代判別の資料としては、相当量の土器がある。弥生時代後期を主としているが、中期の一ノ宮式の壺形土器片(第4図11)1個も見られた。後期の土器には成川式の一群と、成川式より稍々古いと思われる土器群および、免田式土器片2個と、沈線文を施した壺形土器片2個が採集されている。これらの土器群の中で、貝製腕輪共伴と目されるものは、採集状況から見て、成川式土器より稍々古いと思われる一群の土器である(第4図1～10、12)。この土器群を仮に松ノ尾式と呼ぶことにする。

松ノ尾式(仮称)としたものには壺形土器の胴部・口縁部・底部が出土している(第4図1～10・12)。これらの土器片から推定される器形は、球形に近い胴部に、外反する口縁部が

つき、底部は平底となる土器で、肩部に三条の断面三角形の凸帯をめぐらすものである。第6図3は成川遺跡出土の壺形土器で、やや胴部が長いが同類と思われる。第7図2、3の甕形土器片も成川遺跡出土である。山ノ口式の系統で、口縁部の「 Γ 」形の



第4図 松ノ尾遺跡出土土器

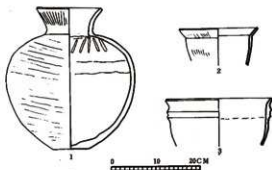


第6図 南九州弥生式後期土器

屈曲部が、自然に外反する形となり、第7図2の土器に見るように、口縁部の屈曲の直跡が、内側に稜線となって残るか、第7図3の土器のように稜線も失われたものもある。第7図3の場合は断面三角形の凸帯が残っている。これらの甕形土器は、前記の壺形土器とセットをなすもので、山ノ口式に続く型式と考えられる。

第6図2の甕形土器は、鹿児島県根占町千束遺跡の第一住居址から出土した甕

形土器である。口縁部の径が最大数値を示し、胴部の張りが弱い。底部は僅かに上げ底となり、口縁部はやや外反して、頸部に一条の絡縄凸帯をめぐらしている。前述の第7図2・3の変形土器に近い。共伴する甕形土器は口縁部のみであるが、外反する器形で、肩部の凸帯の有無は不明である。千束遺跡第2住居址から出土した甕形土器(第7図1)が同類ではないかと思われる。この土器は平底で球形に近い胴部に、外反する口縁部がついたもので、凸帯は有しない。千束遺跡第1住居址出土の変形土器(第6図3)とセットをなすものと考えられる。便宜上千束式なる呼称で呼ぶことにする。この型式は松ノ尾式(仮称)の後に位置するものと思われる。千束遺跡第1住居址出土の炭素によるC₁₄測定の結果は、紀元145年±95年(GaK-4158)という数値が示されている。



第7図 南九州弥生式後期土器

松ノ尾遺跡出土の今一つの土器群に成川式がある。大形甕形土器片 小形甕形土器、高杯形土器片などが出土している。大形の甕形土器は、推定高70センチメートル、径45センチメートル、肩部に刻目凸帯をめぐらし、底部は丸底に近い尖底で、径3.5センチメートルの孔を穿ったものである。口縁部から肩部にかけて欠失しているが、おそらく壺棺として使用されたものであろう。

成川式の甕形土器は、やや胴の張った倒卵形の器体に、外びらきまたは直口の短い頸部がつき、小さな平底か、丸底に近い尖り底で、肩部と、頸部と胴部との継ぎ目に絡縄凸帯または、幅の広い凸帯をめぐらすものである。広幅凸帯には平行斜線文、竹筭文、斜格子文などを施している。

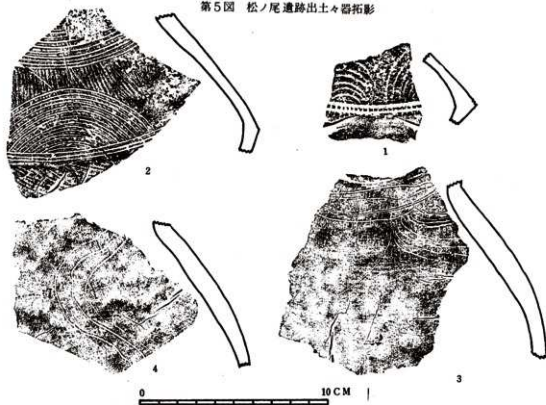
甕形土器は、直口で胴部の張らない器形に、あげ底の脚台をつけたもので、口縁下に絡縄凸帯を一条めぐらすものである。

松ノ尾遺跡出土の成川式土器も前述と同様であるが、本遺跡では甕形土器の出土がみられないのは、埋葬遺跡としての本遺跡の特徴であろう。

成川式は千束式に続く時期で、弥生式土器の終末形態と思われる。第6図1の変形土器は、千束遺跡出土の成川式であるが、ピットに貯蔵された貝を被って、蓋として使用されていたものである。この貝のC₁₄測定値は、 $\text{AC}13$ 、紀元445年±85年(GaK-4221) $\text{AC}99$ 、紀元430年±85年(GaK-4222)という数値を示している。

松ノ尾遺跡では、前述の山ノ口式、松ノ尾式(仮称)、成川式の他に第5図に示した土器が出土している。第5図1・2は免田式である。器形、文様から見て、同型式としては古い型式に属し、とくに1がそうである。同図3・4は甕形土器の破片で、頸部つき目以下の胴部破片

第5図 松ノ尾遺跡出土土器拓影



で、浅く不規則な沈線文が施されている。沈線を重ねて弧状に描いた点から見て、免田式の重弧文を模倣したものと思われる。成川式には絵画と見られるような線刻の例がしられており、これもその一つと見られるから、成川式に属するものと見るべきであろう。

松ノ尾遺跡出土の貝製腕輪の年代について、判定の資料となるものは、前に述べた共伴遺物と見られる松ノ尾式と仮称した土器群である。後期の中では、むしろ前半に属すべき土器型式と思われ、松ノ尾式（仮称）に次ぐ型式として千束遺跡出土の千束式と仮称した土器は、C₁₄測定値が紀元145年 ± 95年で、多少古すぎるように思われるが、これらを考慮に入れて、松ノ尾式（仮称）の年代は先づ3世紀と考えるとよい。とすれば貝製腕輪の年代を3世紀と見ることが妥当であろう。仮に腕輪の共伴遺物として成川式土器があげられるとしたならば如何であろうか。成川式土器は弥生時代終末期の型式であり、実年代については5世紀に属すとも言われている。

千束遺跡におけるC₁₄の測定数値もそれを裏づけるが如くである。松ノ尾遺跡においても鉄鍬⁵³が出土しており、この鉄鍬は成川式に伴う可能性がある。このような資料からすれば成川式土器の年代を一応5世紀とすることはゆるされよう。その結果として松ノ尾遺跡出土のゴホウラ貝製腕輪も、5世紀に比定されることになる。とすれば、松ノ尾遺跡出土の腕輪は、ひ

しろ畿内を中心として製作された鍬形石を原形として、ゴホウラ貝に移したものであるという解釈がなり立つ。

鍬形石は古墳時代の前期から中期初頭に造られたと言われているが、後にははだいに大型となり、貝輪から離れた形となっている。即ち、厚さを増し、縦あるいは横の深い条線が表裏面に刻まれ、突起もなくなり、板状部は著しく大型化している。松ノ尾遺跡出土の腕輪が鍬形石からゴホウラ貝に移されたものとすれば、時期的に見て、このような終末期の形態からでなければならない。いまここに両者を比較すれば、何人にもその可能性のないことが明らかとなるであろう。

鍬形石の分布が、畿内を中心として、石川県から岐阜県を東限とし、西は大阪県に出土の記録と、福岡県沖ノ島に出土例があるだけであり、南九州では畿内古墳文化の波及が5世紀中頃以降と見られることなどの条件を考慮するならば、前述の仮説は成立しないことが明らかであろう。

4 む す び

ゴホウラ貝が初めて九州にもたらされたのは、弥生時代前期初頭である。最初の移入地が南九州の西岸であることは、高橋貝塚の資料によって明らかであり、しかも既成の貝製腕輪としてではなく、その素材としてもたらされた。この背景には、縄文時代後期以来の南島（トカラ奄美・琉球諸島）との交流が指摘される。

南島からもたらされた貝類は、ゴホウラ貝だけではなく、オオツタノハ、イモガイなど、弥生時代の貝製腕輪の素材となって、その時代の特色をかたちづかった巻貝類が移入されたのである。

弥生時代前期も末になると、ゴホウラ貝製腕輪の分布は北九州・山口地域に達している。高橋貝塚では背面腕輪と腹面腕輪の技法が見られたが、北九州・山口地域では腹面腕輪の技法だけとなり、この時期に至って、従来見られなかった、大型巻貝の形を残したままの、部厚い腕輪がつくれ、製作のなかに独創的な意欲があらわれてくる。着装者の権威を表現しようとする要求の現われであろう。

この時期の腕輪は二つの系統に分れる。一つはゴホウラ貝の袖を生かして、これを取り入れた形の金隈型であり、他の一つは体層部分だけを素材とし、丸味のある、仕上りの入念な土井辰型である。この二系統は、それぞれ次の時代に引き継がれる。金隈型が鍬形石の祖形の系列の、最初のものであることは前に述べた。

中期になるとゴホウラ貝製腕輪は、北九州の内陸部まで入りこみ、²⁹ 濃密な分布を示して、有明海沿岸から周防灘沿岸におよぶ地域に定着するとともに、定形化して数量も増加する。これが諸岡型と立岩型である。諸岡型は土井辰型の系統であり、立岩型は金隈型の系統として、鍬形石の祖形の系列をかたちづくる。

中期後半になるとさらに瀬戸内海沿岸・山陰地方へと分布を広げていったものと思われる。

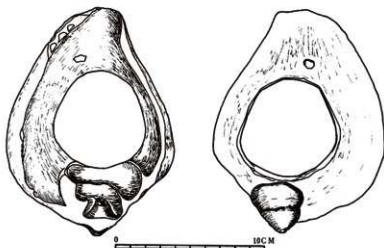
兵庫県神戸市兵庫区熊野町において、1918年(大正7年)に発見された壺入りの、貝製腕輪40個(あるいは35個ともいう)は、計測されたものによると、長10.3センチメートル、内径8センチメートル、厚さ数ミリメートルとされている。容器として使用された壺の年代は弥生式中期後半とされている。形態が立岩遺跡出土の腕輪に酷似し、立岩型であることを示している。ゴホウラ貝製の腹面腕輪と思われる。工作法は、肩角突起と軸を含む面で切断し、螺旋と前溝部を適宜横切りして、五辺を有する、五角形に近い形となっているが、立岩遺跡出土品に比べて、細身で、内層部の側線が、やや湾曲が強い。厚さは立岩遺跡出土品が、1.5センチメートルであるのに対して、数ミリメートルと薄くなっているが、ゴホウラは肩角突起は1カ所しかないから、1個の貝から1個の腕輪しかつけない。失敗作まで考えると、40個の腕輪を作るには、少くとも数拾個の貝を必要としたであろう。立岩型の要素である袖を取り入れており、鰐形石の祖形の系列に入るものではあるが、全体に丸味を帯び、繊細となって、鰐形石からは一歩遠のいた形となっている。

西日本に分布をもつゴホウラ貝製腕輪の、最も盛行したのは、北九州であって、ここにこの文化は根をおろし、ここで発展した。この基盤のなかで、鰐形石の祖形は、さらに狭い福岡平野と、嘉穂盆地において基礎ができ、形成されていった。ところが後期になるとゴホウラ貝製腕輪だけでなく、すべての貝製腕輪が、この地域から後を断つのである。森貞次郎氏は「貝釧を祖形とする銅釧が発生する一方、貝釧はその後も引続いて行なわれたと見られるが、弥生時代の後期から古墳時代の前期に南方産の貝釧が入手困難な時期があったのではないかと思う。」と述べて、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて南方産の貝釧が使用されなかったことを認めている。関分直一氏は「南海産貝の利用が弥生時代後期頃から、古墳時代にかけて次第に減少して補給が困難になったというような事情によるものではなく、貝に代りうる。貝より魅力の大きいものへの嗜好が強くなっていったためではなかろうか」として対象に青銅と碧玉をあけている。また杉原荘氏は「壙墓を中心とする厚葬の風習は、この後期前半まで認められるが、どういふわけか、その後に至ると現在まで何等の資料に接することができないのである。さらに、この北九州地方では、その時期の一般的な墓制さえよく分らないという状態である。」と、述べて、後期後半になると葬制自体が不明確になるということで、南海産貝製腕輪がみられなくなった原因も、補給の困難とか、嗜好の変化というような事由の外に、社会的変動というような原因があったように思われる。いづれにせよ、弥生時代後期より古墳時代前期に至る時期は、南海産貝製腕輪がほとんど出土していないという事実は明らかであろう。しかしここに例外的な事実があげられる。それは南九州においては、後期においても貝製腕輪が盛行していることである。種子島においては広田遺跡において大量の貝製腕輪が発見されている外、上熊野貝塚でも貝製腕輪が見られ、表面採集の資料から推定しても一般に貝製腕輪の着装が行なわれていたものと思われる。

この傾向は本土においては南九州においても見られた。松ノ尾遺跡がこれである。一般に後期に至って、貝製腕輪の着装が見られなくなった時期に、南九州において貝製腕輪の伝統が受

け縫がれたものと見られる。北九州における立岩型のゴホウラ貝製腕輪は、松ノ尾遺跡に受け継がれてさらに発展し、鉄形石の祖形を完成させた。しかも、オオツタノハ製腕輪、イモガイ製腕輪もセットとしてである。松ノ尾遺跡出土のゴホウラ貝製腕輪が、鉄形石となる過程には、一つのステップがあった。それは福岡県竹並古墳出土のゴホウラ貝製腕輪である（第16図5）型式的にも松ノ尾遺跡出土の腕輪と紫金山古墳出土の腕輪の中間形態を示すとともに、文化の伝播についても、南九州より北九州を経て畿内へという経路を示す。

第14図 宮崎県大坪地下式横穴出土ゴホウラ貝製貝輪



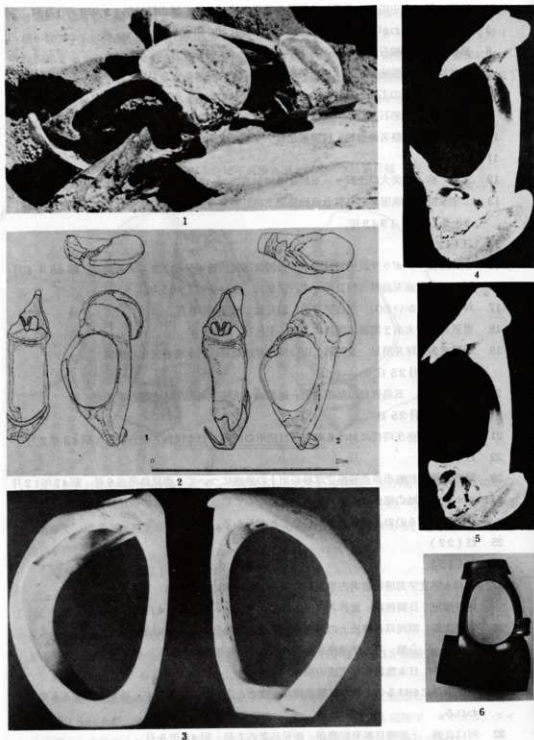
ゴホウラ貝製腕輪は古墳時代に至って再びあらわれる。宮崎県、大分県、熊本県などにその例が見られる。宮崎県大坪の地下式横穴出土の腕輪（第14図）はその一つである。背面腕輪であって、南島の腕輪と軌を一にするもので、大分県のものも同様である。これらについては他日を期したい。

（昭和48年8月8日）

〔註〕

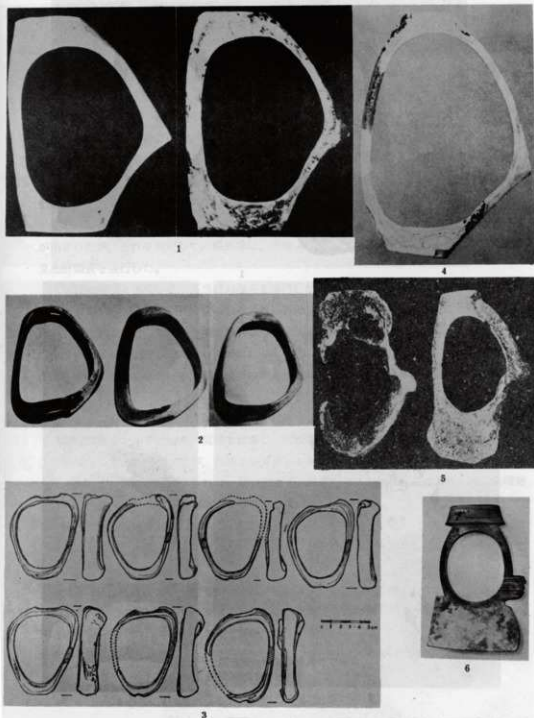
- 1 小林行雄 古墳の話 昭34年発行 岩波新書
- 2 永井昌文 弥生時代の巻貝製貝輪について、日本考古学協会第35回総会研究発表要旨 昭44年4月
- 3 弥生時代に貝輪の素材として使用されたカサガイを2枚貝として記述した文献がしばしば見受けられるが、腹足綱に属する巻貝である。オオツタノハなども同様で、ゴホウラ、スイジガイ、イモガイなど弥生時代に貝輪の素材として使用されたものに巻貝が多い。

- 4 八幡一郎 先史時代の交易, 人類学先史学講座第3巻 雄山閣 昭13年8月10日
- 5 小林行雄「くわがたいし」 考古学辞典 平凡社 昭34年6月
- 6 高橋健自 車輪石と獣形石 考古学 聚精堂 大2年8月
- 7 小林行雄 貝製腕輪 日本原始美術6 講談社 昭41年2月
- 8 三木文雄 石の工芸 日本原始美術6 講談社 昭41年2月
- 9 村井崑雄 獣形石 日本考古学辞典 東京堂 昭37年12月15日
- 10 渡辺正気 司祭者の腕輪 奴国展図録 夕刊フクニチ新聞社 昭48年4月
- 11 註(10)
- 12 三島 格 奄美大島土佐ヤー洞窟遺跡調査概報 考古学雑誌 第50巻2号 1964年
- 13 三宅宗悦 大隅国徳之島喜念原始墓出土の貝製品及出土人骨の技術に就て 考古学雑誌 33巻10号 1943年
- 14 註(12)
- 15 永井昌文 ゴホウラ貝製貝輪出土分布図奴国展図録 夕刊フクニチ新聞社 昭48年4月
- 16 河川貞徳 鹿児島県高橋貝塚 考古学集刊 3-2 1965年
- 17 坪井清足 かいわ(1) 考古学辞典 創元社 昭34年6月
- 18 世界考古学大系2掲載の図版による 平凡社 昭35年
- 19 金岡丈夫 坪井清足 金岡恕 山口県土井浜遺跡 日本農耕文化の生成 昭36年3月25日
- 20 小田富士雄 五島列島の弥生文化—総説編 人類学考古学研究報告第2号 昭 昭45年7月25日
- 21 三島 格 弥生時代における南海産貝使用の腕輪 日本民族と南方文化 昭43年2月
- 22 註(2)
- 23 河野治雄 枕崎市東鹿籠松之尾砂丘出土の鉄鍔について 鹿児島考古6号 昭47年12月
- 24 ゴホウラの袖の部分は、成員(親貝)になって形成される。この腕輪は袖の部分も取り入れられているので、成員を使用したことがわかる。
- 25 註(22)
- 26 註(15)
- 27 京都大学文学部博物館考古学資料目録—1960年3月25日
- 坪井清足 貝製腕輪 世界考古学体系2 平凡社 昭35年4月
- 28 森貞次郎 福岡県香椎出土の銅鐙 鐙 考古学集刊2-1 昭38年6月
- 29 国分直一 介類 考古学講座9 雄山閣 昭46年9月15日
- 30 杉原庄介 日本農耕文化生成の研究 昭38年
- 31 広田遺跡におけるゴホウラ貝製腕輪は、ほとんど一型式であって、後期に属するものと思われる。
- 32 河川貞徳 上能野貝塚発掘概報 鹿児島考古7号 昭48年5月

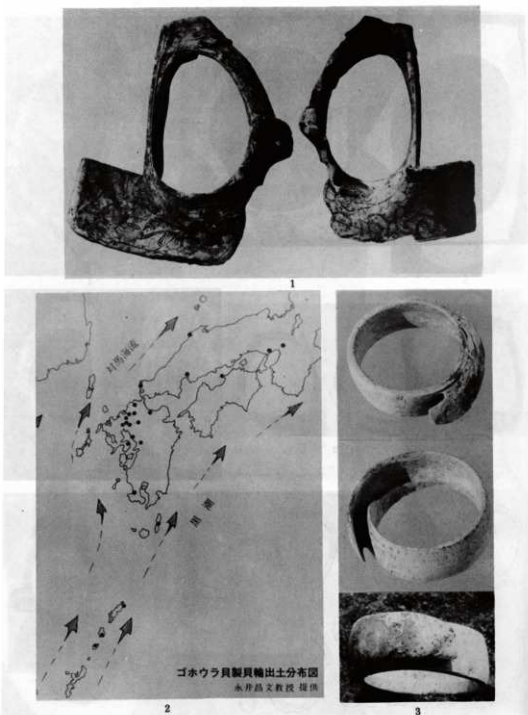


第15図

1, 2, 4, 5は福岡市金隈遺跡出土ゴホウラ貝輪(1, 4, 5は
 夕刊フクニチ刊奴国展より2は古代文化25巻5号より) 3は山口県土井が浜出土貝輪
 (世界考古学大系2より) 6は紫金山古墳出土銀形石(世界考古学大系3より)



第16図 1は立岩出土ゴホウラ貝輪 2は諸岡出土ゴホウラ貝輪 (1・2は夕刊フクニチ刊叙国展より)
 3は年の神出土ゴホウラ貝輪 (熊本史学年の神弥生遺跡より) 4は兵庫県熊野町出土ゴホウラ
 貝輪 (世界考古学大系2より) 5は竹並出土ゴホウラ貝輪 (日本考古学選集9より)
 6は紫金山古墳出土鉄形石 (世界考古学大系3より)



第17図 1は紫金山古墳出土ゴホウラ貝輪（世界考古学大系3より） 2はゴホウラ貝輪出土分布図（夕刊フクニチ奴国展より） 3は松ノ尾遺跡出土イモガイ貝輪